

# ケニア社会の不安

内  
田  
雄  
一

## 1 欧米志向共和国の誕生

ケニアは終始欧米志向をつづけてきた。それは、初代大統領ジョモ・ケニヤッタが選択した資本主義路線でもあった。

ケニヤッタは、1929年、白人政府の土地行政に抗議を表明するため、キクユ中央協会から派遣され、はじめてロンドンに渡る。それ以降翌年の一時期帰国をはさみ、15年間ヨーロッパに滞在する。この間、ドーバー海峡を越え、ドイツ、ロシア、トルコにまで足をのびた。ナイロビ近郊の寒村

に生まれた男の大きく見開かれた目に、大ヨーロッパの文明は強力かつ重厚と映った。

彼は欧州滞在中にモスクワに3年間滞留し、社会主義教育を受ける。しかし、たとえば、国際的な視野からプロレタリア革命を論議することなどに彼は気乗りしなかった。思索を好む理論家肌でなかった彼には、マルクス主義の理論構築も高貴な知的遊戯と映ったかもしれない。先進社会を知れば知るほど、彼の関心は母国ケニアに近代化を、それも即応的にもたらすことにのみ集中した。数十年後に勝利する国際共産主義なるものなど待つはいられなかった。

1963年独立を祝ったケニアは、15年以上の長きにわたってこうして白人世界を生きてきた男をトップ・リーダーとしてもつこととなった。彼は、民族主義者であると同時にヨーロッパについて国内最良の理解者であり、そして多分にプラグマティストであった。協調相手には、美辞麗句の理論をかかげる共産政権よりも、きのうまでの闘争相手イギリスの方を選んだ。かつての入植者は、放牧用でしかなかった土地を豊かな農場へと一変させた実績を示している。

ケニヤッタは、タンザニアのニエレレ大統領のごとく社会革命理論を国策の基礎に据えることもなく、また、西アフリカのギニア大統領セク・トーレのように旧宗主国への敵意、憎悪をバネとして第三世界の英雄を気取る意図などまったくもちあわせていなかった。母国の誕生時に、実利を最優先する現実重視型の「国父」をたまたま持ちえたことが、ケニア国民にとっての幸運であった。対欧米協調外交、西側資本主義国への開放政策は数多くの外資導入に成功した。

## 2 こだわりすくない「近代化」

非欧米世界において、「近代化」は避けてとおれない大きなドラマのひとつである。西欧の衝撃に直面したとき、東アフリカ一帯には強靱な抵抗力もなく、土着の伝統文化は大きな変容をせまられた。

19世紀末になっても、強力な王権の歴史を知らないケニア一帯では、富の集積も小規模であり、また文化の積み重ねも豊かとはいえなかった。伝統は、あいさつのしかたなど、とりわけ人間関係のうちに、塗り込められている。その精神性は、年上の識者に代表される祖先崇拜と共同体の秩序維持に必要な友愛に具体化されていた。しかし、倫理思考に根ざした信仰、体系的な精神文化は未成熟のままであった。宗教のひとつの大きな役割が政体秩序の整備にあるとすれば、強大な統治国家未形成の地に確固たる信仰の必要性もなかった。

オマーンからきたイスラムは沿岸部にとどまった。エジプトから南下したムスリムたちは、エチオピアの高地にはばまれ、ソマリア、スーダンと東西に分かれそこで止まり、ケニア、ウガンダまで降りて来なかった。人々はみずから準拠点をつくりえず、外から識別基準を与えられることもなかった。ひとつの古典としてのしゅん厳な尺度、中心点なしの社会であった。内と外、礼と非礼、善と悪の別などははっきりとあっただろうけれども、イスラムに見られるような絶対否定、決定的対決をうながす基点がなかった。収斂点がなければ、万物は拡散していく。たがいに異なっても、許容できた。この受容力が東アフリカの、ケニアの特性だろう。排他的に拒否せず、異質を、その利点に納得して、受け入れ、わが物とする能力で

ある。

このような開かれた拡散状態のうちに、19世紀後半、ヨーロッパが入ってきた。正規軍には軍服まで用意し、銃の修理工場もそなえ、数万の兵を擁してフランス軍と戦い抜いたサバンナの傑出した英雄サモリは東アフリカにはいなかった。烏合の衆でしかない人々は簡単に屈服し、英語を学び、農耕技術を習得し、生産と販売の関心に興味をもち、ついでに新しい神まで信じて、キリスト教徒の資本主義者となった。

自意識過剰の文化は社会の発展を阻害することにもなる。尊大な伝統文化をもたないケニアの人びとは、態度を硬化させることなく、生活様式をヨーロッパ化させていった。近代化を推進すればするほど、非または反アフリカ的ともなる危険を伴うものだが、確固たる土着がなければ、自己破壊の悲惨もすくなくてすむ。過去が小さければ、過去へのこだわりも小さくてすむ。実利あると判断すれば、新しいものにとびつくことができた。

新政府のリーダーたちの「ルック・ウエスト」政策により、西欧の導入が加速された。有用で役立つなら、それが価値であった。アメリカ式効率が全能の神になろうとしていた。タブーなるものをもちすぎない社会に生まれ育った人びとは、のびのびと営利を求めた。そして、ケニアは競争社会となった。

## 3 迎合する権威

大陸では人それぞれが、時空を超えて、深いところで出身家族、親族と結びついている。部族と切り離された自分の生を考えることはむずかしい。今の自分は過去の祖先であり、未来の幼子である。この連鎖を断ち切って単独の個となった者には生存の基盤がない、とされてきた。過去と未来につ

ながらない現在には意味がないからである。

部族のなかでの生い立ちがその人のアイデンティティとなっている。縁せきが彼の履歴である。育ちのうちに彼の個性が刻印されている。農村共同体がその育成の場であり、人づくりは各家庭が施すしつけによってなされていた。共同体がひとつの統一、調和体として機能してゆくためには、構成員全員が同じ基本価値を共有していることが望ましい。明日への存続を考える場合には、その価値、モラルの継承が必要となってくる。そして、しつけが共有価値の伝達手段であった。

しつけ教育の基本は年長者への服従、畏敬である。非礼、尊大な態度はきびしく罰せられた。その年長者たちが元気を失い始めた。植民地経済のもとで、そして、独立後は都市生活の農村への浸透により、彼らの精神的権威が購買力というあまりに俗界の実力に、久しくおびやかされてきた。消費経済が年々強まっていく一方で、長老の手には今現金がない。無形文化財は、正当に評価されることで生き残ることができる。一定の人間関係の在り方にもとづく伝統も、村の年寄りたちが元気なあいだは健在であった。共同体の礼法は消え去っていくのだろうか。

植民地期、とりわけ英語学校に入った子どもを前にした父親には、もう以前のような強制力も制裁権もなかった。純朴な農耕民であった両親にとって、外国語を話し、わけのわからぬ知識を多々もっている様子の子どもは、ちいさい別世界のごとくであったろう。そして、この身内の別世界は、強大な富と権力をそなえた白人の異世界へとつながっていくのかもしれない。学校という新しい環境で「近代」について勉強する息子、娘たちは、一家にとって豊かな生活への橋渡し役となるかもしれない貴重な存在であった。社会全般が西欧文明に迎合せざるをえないように、親は異邦人へと

成長していくこどもに迎合せざるをえない。

そして現在、かならずしも処罰者たりえなくなった父と母は、すくなくとも家族をむすびつける愛情の中心点として残った。家族愛の要となった両親は、ときに家計を十分まかなえず、それゆえこどもたちにとって理想モデルでも到達目標でもなくなりつつあった。柔軟で適応力があっても、無力で妥協的とも言える権威なき両親のもとで、第2世代は、両親世代と異なる自分たちの生活スタイルを作り出しつつある。家庭内での規制が弱まって、社会全体の規律がたるんできた。

#### 4 治安の悪化

村落共同体のまとまりがケニアの国内秩序の母胎であった。現在この一体感が急速に崩れつつある。血縁と地縁にむすばれた人間関係がゆるみはじめた。共同体のなかで、家族の絆が弱まり、世代間に亀裂が生じた。伝統価値を共有しない若者たちが、町文化をめざし、離農、離村しはじめた。村で食いつめた者は、男も女もこぞって都会生活を意図した。ヨーロッパ中世期、「都市は人を自由に」した。若者は多数、町に出て出自の連鎖を断ち、自由な個人となった。共同体の弱体化と無拘束な私人の出現がケニアの治安を脅かすようになった。

大都会には、村落を支配している周囲からの規制力がない。そして、そこに生活している人間には内からの自制力も希薄である。村を出て自由になった分だけ人は危険な動物となった。

広範なそしてもうひとつ具体的な統計が入手できないままだが、ケニア全体の受刑者数は、1965～71年の7年間に、1.6倍に増えている<sup>\*1</sup>。ケニア第3の都市キスムでは、72～73年の1年間の有罪確定件数が37.9%の激増をみた。ナイロビの少年裁判

所に出廷した非行少女の数も74年の95名から83年には284名へと、3倍弱に増えている\*<sup>2</sup>。先進国の後追いをし、経済発展にある程度の実績をあげること成功したケニアは、同時に、欧米社会の治安悪化をも実現してしまった。

たえずより多くのものを、という上昇志向が現状をより貧しく見せるという悪い結果に終わっている。貪欲という精神的飢餓状態が、必要以上に、モノ不足をあおりたてる。貧困から、貧富の格差の大きさから、嫉妬から、自制心の欠如から、現状に満足できない悲しさから、後発世界での先進国ケニアは犯罪多発社会へと移行中である。

農村部で共同体が解体しはじめたとき、社会を統合するという事業は、国家が引き継ぐはずであった。しかし、農村と都市の隔たりの拡大に加え、多くの部族をかかえる国家の統一はほとんど百年の計にひとしい感がある。都会生活のうちで族による結束が弱まってきているほどには、国民、同胞意識が育ってきていない。

出身共同体にはへその緒的な帰属感をまだもっている、と同時に、ケニア人意識や市民の自覚にも徐々に目覚めつつある、というもうひとつ定まらない自己確認は、いらいらだつことが多い都会生活のただなかで、容易につき崩される危うさをもっている。

## 5 共同体の復権に向けて

犯罪抑止力を回復するためにはどうしたらよいか。国家から腐敗を一掃し、健全な法権力を確立すること、貧困退治に希望がもてるような成果をあげることに、同胞意識、協力的な人間関係をつくりあげるため学校教育を充実させること、などなど対策列挙にはこまらない。けれども要は、貧富を問わず、人間がばらばらになることが、欲望

の無責任なそして利己的な展開を容易にするならば、人間をそのうちにもどす共同体の枠組みづくりを再考してみてもどうか。

ナイロビでは、第2次大戦をはさんで各部族別に協会が設立され、部族単位で町の秩序、治安維持に取り組んでいた\*<sup>3</sup>。市内居住の部族出身者のなかから、「最良のメンバー」がボランティアとして協会の活動に参加していた。たとえば、ルオ・ユニオンが戦前から、全キクユ・ユニオンが1945年から50年頃まで、出身地の村と連携をとりながら、部族共同体のよき伝統精神を都会の日常生活のなかにも具体化しようと意図していた。

松田素二氏は、「絶対的生活困難」が原因となって「私化の進展」が進み、互助講が今大きなマイナスの転機にさしかかっている、と報告している\*<sup>4</sup>。困窮が今後ますます深刻になっていくとして、部族ユニオンの活動は、自己資金不足から自滅の道をたどらざるをえない。身内だけの血縁ユニオンとして生き残るほかないであろう。

共同性の回復、強化が必要なときに、共同体の細分化がすすむ(細分化がすすむから、まとまりが必要となる、のであるけれども)。大方の個人は、周囲にたいし不信感を深め、自衛本能を強めて、「私」のうちに小さく貧しくまとまって、社会は逼塞する。しかし、いつでもどこでもタフで野心家タイプの男たちが生き残るものだ。彼らは今以上に、紆余曲折を経て、少数の強力な民族資本家へと成り上がっていくだろう。

現モイ大統領も裸足の小学生であった、あの皆一様に貧しかった頃からまだ1世紀も経っていない。中央政府が、この分断され、孤立した圧倒的多数の零細民に効果的なテコ入れをしない限り、社会は富裕と貧窮にいつそう分極化し、歪みを増すだろう。複数政党制にもかかわらず、国家レベルでの協調、分有、共栄は言葉だけとなる。そう

いったとき、ケニア版「億元戸」教家族に支配されたラテンアメリカ型国家の現実に絶望し、いらだったケニア版センドロ・ルミノソが首都の官公庁、繁華街に時限爆弾をしかけてまわらない、と誰が断言できよう。

\* 1 Erasto Muga, *Crime and Delinquency in Kenya*, East African Literature Bureau, 1975.

\* 2 Muiban C.W., "Juvenile Delinquency with

Social Referece to Child Prostitution in Kenya," Dissertation, University of Nairobi, 1984, typewriting.

\* 3 Luise White, "A History of Prostitution in Nairobi," Dissertation, Newham College, 1983, typewriting.

\* 4 松田素二「再編成期の出稼ぎ民社会」(1992年9月25日, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究会「アフリカにおける都市化の比較研究」〔主査・日野舜也〕での報告)。

(うちだ・ゆういち/創価大学)